
昔話：異世界人と死に至る病

錆色の月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔話：異世界人と死に至る病

【Nコード】

N0123Q

【作者名】

錆色の月

【あらすじ】

中世くらいの文化レベルの世界で、異世界人とか召還したら、防疫の概念なんてないだろうし、運が悪ければ、物凄い勢いで治療法確立不可能な異世界の死病が蔓延しそうで怖いよね、という話

昔々ある所に魔術に秀でた国があった

国は優れた魔術師集団を抱えていた

魔術師集団は、次々と新しい魔術を生み出し

稀に失われた古い魔術を復活させた

その魔術がどちらに類するものだったのか、は分からない

どちらにしろと、魔術師集団は異世界への扉を開き、異世界人の召還を成功させた

召還された異世界人は、珍妙な服を着た、聞いたことの無い言葉を喋る

だが、それさえ除けば何処にでも居る普通の子供に見えた、という

異世界人を召還した魔術師集団は、その技術を余すところなく発揮して、徹底的に異世界人を調べあげた

その結果、異世界人には魔力が無いこと

魔術を除いた文明のレベルは異世界のほうが大分進んでいること

言葉が全く通じないこと、などが分かった

魔術師集団は、異世界人の文明を手に入れようと、異世界語の翻訳に当たったが

その過程で、どうも肝心の異世界人自身が、異世界のことをそれほど詳しく知っているわけではない、ということが分かって来た

魔術師集団の熱意が目に見えて冷めていった

いつしか異世界人は魔術師集団の興味からはずれ、お払い箱となりにかけていた

これと言って金になる特技を持たない異世界人が

生きていく上で必要な暗黙の了解どころか

一般常識すら満足に学べないまま城から追い出されれば

早晩野垂れ死ぬことは分かりきっていた

異世界人の命は風前の灯であった

そんな時、国の末の姫が、異世界人を道化として拾い上げた

もはや異世界人に大きな価値は無かったが

玩具には、もとよりそんなものは求められない

末の姫からすれば、異世界人はちよつと珍しいだけの玩具であったのだ

異世界人は末の姫に感謝し

必死になって多少の脚色を交えた異世界の話や

手品の真似事をしてみせながら、どうにか道化の役目をこなしていた

その働きぶりはそう悪いものでもなく

その後、少なくとも城から追い出されそうになることは無かった

さて、しばし時は流れ、城に病が流行った

死病である

肌に赤い斑点が浮かび、高熱を発し、一月ほどで死に至る

魔術師集団は死力を尽くし、この病に当たったが

全く成果を出せず、1人また1人と病に倒れ死んでいった

その間、いい加減、国の言葉を喋れるようになっていた異世界人が看病は自分がやるから病人と自分を隔離して欲しい、としつこく頼み続けていたが

末の姫を除く全ての人間から、道化のたわ言と無視された

やがて

女中が死に、兵が死に、民が死に、王が死に、国が死んだ

異世界人を残し皆死んでいった

その末期、止めるものもなく、異世界人は望みどおり病人の看病に

奔走できたが

もはや何の役にも立たなかった

異世界人は医者ではなく、魔術師でもなく、ただただ無力な道化だったのだ

異世界人は道化の仮面で泣き顔を隠し、無駄な看護を繰り返し、その合間に遺体を埋葬した

異世界人は知っていた

この死病が元は異世界のものであることを知っていた

異世界人自身は、生まれながらに、この死病の耐性を獲得していることを知っていた

異世界人こそが、自覚の無い死病の運び手であったことを理解していた

気付けば城に居た人間は末の姫を残し皆死んでいた

その末の姫も死病に掛かっていた

治る見込みは勿論無い

末の姫は病に苦しみ死んでいくのは嫌だ。その前に殺して欲しい、と異世界人に頼んだ

異世界人は、末の姫の望みをかなえると、城に火を掛け、その地を去った

死病は殺した

神に祈るものも、武を頼みとしたものも、金を信じたものも、等しく殺しつくした

容易く国境を食い破り、周辺の国を蹂躪し、瞬く間に大陸を席卷した病が大陸の端にとどく頃、大陸の人口は5分の1以下になっていた

そして、魔王が現れる

魔王は、炎とともにあった
焼くのだ

魔王は街を焼いた

病に冒されていないものが居ればさらい、病人は殺して焼いた
従うものには食料や衣服を授け、逆らうものは殺して焼いた

誰もが魔王を恐れ、逆らうことを避けた。恭順し、戦列に加わった
魔王の軍勢は病を追うように、病のように広がった

病を止められるものは居らず、魔王を止められるものもまた同様に
居なかった

病が通った後には死体が転がり、魔王が通った後には灰が降り積もる
ただ、魔王が通った後に、死病に侵されるものは居なかった

魔王は死病すら焼いたのだ

いつしか灰が大陸中に広がり、死病を患うものは居なくなった

魔王は死んだ。殺された

腹心に裏切られ、脾腹を刺されて死んだ

魔王は人を殺しすぎた

大陸に残った民を恐怖で纏め上げ

死病を焼き尽くすことは出来たが

そのままあたらしい国を築き上げるには

魔王はあまりにも多くの人間から恨みを買いすぎた

自業自得だ、と誰もが嗤った

だが、その死に顔は意外にも安らかなものだったそうだ

腹心が確認した

後に帝国の初代皇帝となる魔王の腹心は

何か思うところがあつたのか、常に魔王の目元を隠していた道化の
仮面を奪い自らのものとした

帝国の宝物庫の片隅には、今も道化の仮面がある
その仮面は、かつてある国の末の姫が異世界人に与えたものによく
似ていたという

魔王は世界に死病を持ち込んだ罪を贖いたかったのか
末の姫を奪った病を滅ぼしたかったのか
或いはただただ何もかも焼き尽くしたかったのか

魔王が死んだ今、その答えを知るものは居ない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0123q/>

昔話：異世界人と死に至る病

2011年1月11日21時08分発行